

## テーマ

# 国債残高の累増に戦前の日本は どう対応したか？

## 適用 分野

財政学、財政史、金融論、  
金融史



## 研究 名称

戦前期日本の国債政策の総体的考察

## 氏名 所属

永廣 顕 教授  
経済学部 経済学科

## 内容

●**特徴：** 本研究の骨子は、国内外の研究を踏まえつつ、新たに発見された資料や研究史的に未利用の資料にもとづき、国債発行・流通市場の実態を総体的に考察しながら、戦前期日本における日銀引受国債発行の全体像を明らかにしようとするところにある。その特徴は、日銀引受国債発行と市中金融機関の国債保有・転売との関連性を検討する点、そして一次資料に拘泥しつつ市中金融機関の国債保有・売却を丹念に追うことで「闇の世界」ともいわれる国債流通市場にメスを入れる点に求められる。その成果は、従来の国債管理史研究の欠落を埋めるだけではなく、国債残高が累増する状況下で金融緩和から金融引締めに移る日銀の出口戦略が議論され、国債を保有している金融機関のリスク管理が問題となっている日本の現状に対し、重要な示唆と打開に向けた戦前期の歴史的事実を正確に提示することになるであろう。

●**研究内容：** 現在の日本においては、国債の大量発行が続き、国債残高が累増していることを受けて、国債管理（債務管理）が財政・金融両面で重要な

政策課題となっている。こうした状況は戦前期にもみられ、その歴史を振り返ることは、現在の国債管理や国債発行市場・流通市場のあり方を議論するうえで参考になるとと思われる。

本研究は、1930年代前半から第二次世界大戦終了の1945年までを中心に、戦前期日本における日銀引受国債発行の全体像を解明することを目指す。その際、これまでの研究において開拓された国債発行・引受の発行市場中心の分析だけではなく、「闇の世界」ともいわれる国債売買・転売の流通市場も分析対象に加え、新たに発見された資料や研究史的に未利用の資料にもとづき、国債政策（国債管理政策）の総体的な考察を試みる。これにより第一次世界大戦後から第二次世界大戦終了までの戦前期の国債発行・流通市場の実態を明らかにし、戦後との連結を図る。同時に、国債残高が累増する状況下で金融緩和から金融引締めに移る日銀の出口戦略が議論され、国債を保有している金融機関のリスク管理が問題となっている日本の現状に対し、同様の状況にあった戦前期の歴史的事実を正確に提示することにより、問題解決の方向性を提示する。

## キーワード

国債政策、国債発行市場、国債流通市場、国債引受、国債売買・転売、戦前期日本

## 連携方法

■ 講演   ■ 研修   ■ 研究相談   ■ 学術調査   ■ コメント   ■ 共同研究